

研究概要報告書

(/)

研究題目	能楽囃子 謡曲の録音の収集・整理・デジタル化と声紋分析 - 昭和 40 50 年代を中心に	報告書作成者	飯塚恵理人
研究従事者	飯塚恵理人 一色忍		
研究目的	<p>能楽囃子・謡曲は、伝統芸能というイメージから、「変わらないもの」と理解されている。しかしながら、実際には飯塚が見ている昭和 50 年代から現在に関してでも、演奏法や間などにはかなりの変化がみられる。例えば能の一曲にかかる時間も、囃子や舞の途中を省略することが多くなったため、全体的に短くなっている。笛のヒシギの音も、最近は強い音が好まれるが、昭和 50 年代までの名古屋では、やわらかい音色が好まれていた。このような時代による変化は、SP レコードや、昭和 40 年代・50 年代のオープンリールによる録音を WAV 化し、現在の演奏と比較することによってしか明らかにし得ない。本研究では、主に名古屋に残された能楽の録音を収集してデジタル化し、その声紋を現在の録音と比較する。このことによって、能楽囃子の変化について考察することを目的とする。複数の曲についてその声紋を分析比較することによってその理由について考察したい。オープンリールによる録音は当時の名人による貴重な録音であるが、所蔵者の代が移ったり、機材が無いなどの理由で廃棄される場合が多く、いまを逃しては収集するチャンスがない。このため、急いで行う必要がある。このような目的意識ではじめたが、幸いにして、昭和 40 年代・50 年代の良質な謡曲の録音約 200 巻を岩田はるみ氏より提供していただくことが出来た。現在その録音の整理と、特に注目されるものについては、WAV ファイル制作を行っている。また戦前の謡曲の SP レコードを積極的に購入した。これは良質な謡曲レコードのコレクションを持つ個人コレクターがあり、その人が一括して譲渡して下さるという条件があったことによる。このことによって、明治から戦前にかけての観世流・宝生流の名人の「声」についてはかなりを収集することができた。これらの SP レコードについても WAV ファイルを作成した。これらによって、「録音」をデジタル保存することが出来た。レコードに関する隣接著作権は 50 年で切れるので、戦前の謡曲レコードについては、音源をホームページから配信することが出来るよう準備をしている。</p> <p>その時代に好まれる「声」「謡い方」の分析は、「同じ曲」について、「同じ流儀」の玄人が謡っている部分の声紋分析を行う必要がある。このような観点から《弱法師》の「ワカ」の部分「住吉の。松の隙よりながむれば。地「月落ちかゝる淡路島山と。」という部分について、観世元滋・井上嘉一郎の SP レコード、観世雅雪のソノシート、梅若実の LP、先代観世鏡之丞の CD の声紋を採取し、比較を試みた。</p>		

研究概要報告書

(/)

研究内容	<p>1.昭和40年代・50年代に活躍した能楽師、能楽愛好者の所蔵する録音(玄人会の録音、稽古用の模範録音等。オープンリール)を収集した。名古屋在住の岩田はるみ氏より謡曲のオープンリール約200巻の寄贈を受けた。</p> <p>2.収集した録音を整理し、重要なものをWAVファイルに変換した。中尾和子氏のもとに送られた喜多流シテ方の福岡周斎の最晩年の稽古テープや、ワキ方高安流宗家高安勝久師所蔵の西村弘敬師の残された録音をWAV化して保存した。</p> <p>3.戦前の謡曲のSPレコードのコレクションを購入し、約80枚をWAV化して保存した。宝生九郎、松本長、野口政吉(兼資)、観世元滋(左近)、井上嘉一郎(嘉一郎)、宝生新など、明治から戦前にかけての貴重な録音が多く含まれている。これらのレコードの目録については飯塚のホームページ「恵理人の小屋」(http://zeami.ci.sugiyama-u.ac.jp/~izuka/erito1/record1.htm)に掲載した。隣接著作権の消滅した音源については、MP3形式にして配信する準備を進めている。</p> <p>4.能楽囃子のひとつである『隅田川』のカケリについて、名古屋能楽堂で行われた四回の演奏を録音し、その楽譜化を行った。またこれらの演奏の声紋を採り、分析した。そしてこの結果を、『能楽囃子「隅田川」カケリの楽譜化とその特徴について』(渡辺康 飯塚恵理人 椋山女学園大学文化情報学部紀要 第5巻 2006年3月発行 1-6頁)にまとめた。</p>
------	---

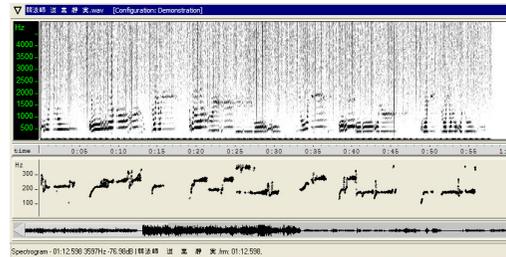
研究概要報告書

(/)

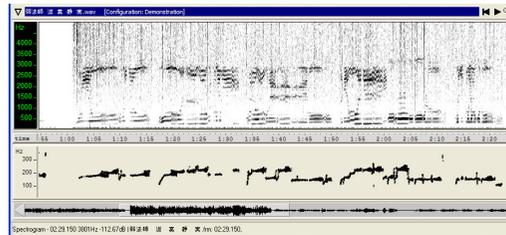
<p>研究のポイント</p>	<p>能楽囃子・謡曲は、伝統芸能というイメージから、「変わらないもの」と理解されている。しかしながら、実際には飯塚が見ている昭和 50 年代から現在に関してでも、演奏法や間などはかなり異なる。能の一曲にかかる時間も、囃子や舞の途中を省略することが多くなったため、全体的に短くなっている。笛のヒシギの音も、最近は強い音が好まれるが、昭和 50 年代までの名古屋では、やわらかい音色が好まれていた。このような時代による変化は、SP レコードや、昭和 40 年代・50 年代のオープンリールによる録音を WAV 化し、現在の演奏と比較することによってしか明らかにし得ない。本研究では、主に名古屋に残された能楽の録音を収集してデジタル化し、その声紋を現在の録音と比較する。このことによって、能楽囃子の変化について考察することを目的とする。複数の曲について比較し、その声紋を分析してその理由について考察する。オープンリールテープによる録音や、SP レコードなどは代が変わると処分されることが多いため、本研究期間においては、声紋分析よりも資料の収集と整理に力点をおいた。</p>
<p>研究結果</p>	<p>名古屋で行われた謡曲の会のオープンリールテープ約 200 巻を収集し、また戦前から昭和 30 年前後に作られた謡曲 SP レコード約 100 枚を購入・整理することができた。購入した SP レコードの目録については、飯塚のホームページ「恵理人の小屋」の「名と声は今もこの世に留まりて-戦前 SP レコードの世界」(http://zeami.ci.sugiyama-u.ac.jp/~izuka/erito1/record1.html)に掲載した。また、これらの購入したレコードのうち、とくに重要な戦前の SP レコード 85 枚の WAV ファイルを制作した。これらの WAV ファイルのうち、「弱法師」のワカの部分について、観世元滋・井上嘉一郎の録音の声紋を採取し、現在戦後の録音と比較している。戦前の SP レコードの録音は、隣接著作権が消滅しているので、前述のホームページより配信するため、現在準備を進めている。</p>
<p>今後の課題</p>	<p>オープンリール・SP レコードの収集と整理、WAV ファイル制作に費用と時間の大半を費やし、まずある程度の規模のコレクションを作成することを目指した。戦前から昭和 40.50 年代の謡曲の「管」を伝える原資料を保存・整理することができたことは、今後の研究に大変有意義であったと思う。本研究に助成いただいたことに心より感謝している。ただ各時代において好評であった「声」「管」にどのような傾向があるのかという分析については、今後の課題として残された。また、SP レコードの録音については、どうしても針の音などによる雑音が大きく、本来の音・声は偲ぶ事はできるものの、CD に慣れてしまった現在の聴取者から見れば不満の残る音質となってしまった。これについては現在作曲家の渡辺康氏（名古屋音楽大学非常勤講師）とともに、SP レコード向けのイコライザの制作を計画しており、より実際の音に近づける努力をしたい。</p>

収集した音源の声紋分析の一例 《弱法師》のワカの部分から

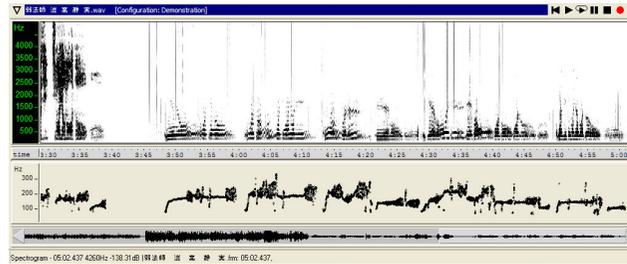
観世元滋 [日東蓄音機 SP レコード 大正 14 年 9 月 24 日録音]



井上嘉一郎 (日本蓄音機 SP レコード)



梅若実 能楽名盤会 LP レコード



上記はいずれも大正時代から戦前にかけて、名調と言われた観世元滋〔左近〕、井上嘉一郎〔嘉介〕、梅若実が、《弱法師》のワカ「住吉の。松の隙よりながむれば。地「月落ちかかる淡路島山と。」の部分で謡った部分の声紋図である。同じ観世流で、同じ節回しに聞こえるのだが、声紋で見ると強弱や音の高低などはかなり異なることが分かる。この時代には観世流にも東京風〔観世元滋が代表的能楽師〕、関西風〔井上嘉一郎が代表的能楽師〕で違いがあり、またいまは観世流となっている当時の梅若流にも謡い方の相違があったといわれている。現在はこの当時の「東京風」で全国が統一されたといわれているが、その経緯や詳細は明らかでない。今後、このような録音の分析によって、それを明らかにしてゆきたい。

(注 : フローチャート図 , ブロック図 , 構成図 , 写真 , データ表 , グラフ等 研究内容の補足説明にご使用下さい。)